

はしがき

人間の運命の一半は靈界との連関において、定まるのであって、本人の自由意志のみで定まるのではない。本人の過去の想念、言葉、行為は一種の惰力的な力をもっていて、その人の運命を一定の方向に導いて行こうとする。これは仏教でいわゆる「業力」と称せられるところのものであって、一定の方向を走る汽車はその後もその方向へ走って行こうとする惰力をもっていて、あまりに急に変向せしめることはできないし、急角度で変向すれば脱線するようなものである。個人のみならず、国家にも、民族にも、過去の想念、言葉、行為の力が蓄積されていて、ある惰力をもってその特有な運命の軌道を走ろうとするものである。そして個人の運命も、国家または民族の一員である限りにおいてその全体的な運命から脱落することはできない。われわれは国家または民族の積み来った業の流れの中に棹さす幾多の舟艇のようなものである。われわれは何れも全体の流れの影響を受けないことはむずかしいが流されるものもあるし、向こう岸に安全に到達するものもあるであろう。そこには個人の努力や、自由意志の働く部分があるのであり、その努力の価値と、運命の変向力とを否定することはできないが、いずれにせよ、個人の運命は国家や民族の運命と混り合っているのである。さらにくわしく言えば地上の人類全体の運命および地球と他の天体との関係における運命とも混り合っているのである。そして地球やその他の天体は、人間の靈魂がそこ

において修行し、向上し、内在無限の神性をより多く發揮するための「場」だということができるのである。したがって、肉体をもっている人間の運命は、肉体を脱却して、よりいっそう進化向上せる靈魂の指導を受けて、種々に導かれ、修正せられつつあるのである。われわれはこれらの関係を無視して人間の運命を論ずることはできない。人間は決して肉体存続期間だけの存在でもなければ、その生活圏が地球上だけに關係しているのでもない。あらゆる天体はわれわれの生活の「場」であり、進化向上の「場」として造られたものであって、天体の運命と、個人の運命とは密接に關係せしめられているのである。われわれがここで言う「運命」とは運がよくて金が儲かるとか、運が悪くて失敗するとかそのような小さな問題を言うのではない。もっと人類全体と、そして宇宙全体とに、連関せるところの大きいなる運命である。

人間はなんのために創造されたか、いずこより来り、いずこに到るか。地球上の民族の靈魂は決して一時期に移植せしめられたるものではなく、数次にわたって、数個の集団として、他の天体においてある程度修行せしめられたものが、遷移し来れるものであると、ヴェッテリニはその靈示において告げている。それゆえに、高く上がるもの、低く降る者、民族はそれぞれの集団的運命を受けるのであり、われわれは現にそれを受けつつあるのである。この靈界の秘密を知らずして人間の運命を予知することはできない。われわれがアジア民族または日本民族としての関心もそこに集中せざるをえないのである。わたしは数百種におよぶ「靈界通信」の書籍を読んだが、ヴェッテリニの靈話ほど、合理的で深い感銘をわれわれに与えたものはないのである。わたしは高級靈ヴェッテリニの靈話を、靈界通信が出て来る経路を語る一節のほか

は、コルニリエ氏が原文に書いた順序にはこの書に集録しないで、その霊界通信を整理して分類的な順序にそれを列べて検索に便利にしたのである。この書はかつて『出生前・生・死・死後の研究』と題して単行本で出たとき数十版を重ねたが、後に『生命の寶相』の第五巻「靈界篇」に収録されてまた数十版を重ねたのである。いずれかの書で読んだ人はこの書を読む必要はないのであるが、戦後、靈媒現象の取り締まりがなくなり、詐術靈媒さじゆつが宗教法人を造って人々を欺あそむく例が頻繁にあるので、その方面に興味をもつ人は、本書をその批評の尺度として対照せられるならば、迷わされる危険は少ないであろうし、人類的運命に連関して、今後、地球上がいかなる運命に見舞われるかについての覚悟を得る上にも、確かにある参考になるであろうと思う。

人類の運命は本書にあるように、高級靈の愛深き指導によつて間断なく修正されつつあるものであるがゆえに、わたしは必ずしも、本書に示されたる各民族の運命を絶対だと信ずるものではない。しかしアジア民族の一員としてアジア民族の今後の運命に関して関心おく能あたわぬものである。

昭和三十七年十二月十日

著者しるす

十六 スピリット自身はいかに出生と受胎の神秘について語るか
自分は「靈魂の受胎」の問題について、いつ靈魂は肉体のうちに宿るのであるか、精確に聞きたいとヴェツテリニに求めた。というのは、多くの靈媒によつて行なわれた数多くの研究の結果によれば、靈魂は四、五歳にいたるまでも、また時には七歳になつてさえも十分その肉体に宿りきつていないという結論の推定に導

くような事実があるからである。これはどこまで真理であるか？
靈魂の宿る時期が相異することがあるなら、それはどういう理由によつてそうであるか？

ヴェツテリニの答えによれば——靈魂が肉体に完全に宿るのは、ふつうは出産の刹那せつなである。しかし懐妊の瞬間から、妊娠の全期を通じて、間歇的かんけつてきに靈魂は形成中の肉体に入り来るのである。靈魂は自分の住居すまいに、いわば自分独自の個性の判を押すためにやつて来る。そしてそこに進行している生理的営みや肉体的遺伝を修正して自己独自の陰影を付与する。そして彼は出産の時に、自己のそれまでの状態についての記憶を全然忘失して、肉体に宿りるのである。これが一般的法則である。しかし心靈研究家（靈能者）の觀察せるところも真理である。なぜなら、幼くして死すべく定められた小児——かかる運命はその靈魂がすでに高き進化をとげ、意識状態がクリヤーであることを示す——においては、靈魂は決して全然は肉体に宿りきらない。これでこれまで自分の疑問に思っていた点が氷解した。（一九二二年二月二十一日の実験会）

○
得るところの多い実験会であつた。

自分はレイヌの靈魂をある産院へ行かせて、その觀察したところを詳しく説明させようと決心した。この実験は成功した。レイヌの靈体は実際の光景を目撃したように思われる。そして母の胎内に受胎しつつかある靈魂とその母との関係についてハッキリと自分に回答した。彼女は決定的な権威ある調子で答えたので、指導靈が手伝っているのだと自分は推測したくらいである。しかし、そうでない——彼女は現在の光景を目撃して報告しつつかあるのは

彼女自身の霊体のみ全然ひとりきりであると主張した。彼女はいう——「わたしは誰から聞いたことを伝えるよりも——ヴェツテリニをどれだけわたしに信じているかあなたはそれを知っている——しかしあの方の話よりも、今話していることには、わたしは自信があるのです。それはわたし自身で見えて知っていますのです。それは真理そのもののように真実です。」

彼女の統一状態は正常である。身体が冷たくなる。自分はレイヌを三度呼ぶ。三度目に呼んだときに彼女はちよつと呻いて、「あなたのおのぞみの所へゆく準備ができました」とかすかにいうのである。自分は実験のために「Refuge Maternal」（母親たちのいる所）を選んで、ここがどういう性質の家であるか、そこへ行く目的がなんであるかを話さないで、レイヌの霊魂にそこへ行くように命じた。

二、三秒ののち、彼女はいう——わたしはある家へ来ました。室の中です。多勢おおぜいの女の人が腰かけたり、働いたり、縫い物をしたりなどしています。みんなお腹の大きい人ばかりですが、妊娠の月かずはいろいろです。自分は彼女の言葉に驚いた。なぜなら、自分は多分彼女は出産前後にベッドの中に横たわっている婦人がズラリと列んでいる大病室を見るだろうと想像していたからである。レイヌがまちがったのではないということ自分を納得したのは、それから大分のことであつた。自分はその後、出産はこの「Refuge」

（かくれ家）で行なわれるのではないということを知つた。婦人はそこですまじ入院して、そこで裁縫とか産児の支度したくとかの軽い仕事をあてがわれる。そして出産が起こるであろうと予測された日の二日前に別の建物に送られ、いよいよ臨産ということになるのである。

ある。この点、興味がある。

（著者注） この点で、この現象が術者と被術者との間におこつた精神交感現象でないことがわかる。

自分はレイヌに十分落ちついて観察して、受胎の進行中に宿つて来る霊魂のすがたを見るように命じた。暫時ざんじのあいだ見まもつていたが彼女は話しはじめた。彼女の報告はちよつと混雑しながら出て来る——その大部分の理由は彼女自身が見ている光景にうち驚いたのと、自分が思いがけない質問を発して彼女を追求したのによるのである。自分はこのとき行なわれた奇妙な対話をここにそのまま再現しようとは思わない。ただこの対話から得られたところの結論の受胎の過程を一説として書いておこう。

性交は実際、霊魂がそれに捕えられるところの罨である。（この言い現わし方は、絶対的には精確だということではできないが、そのくわしい訂正は後の実験録にゆずることにして、ここにはその当時了解したままの行文を保存しておく——コ氏後記）それが低級な霊魂の場合におけるがごとく無意識的であるにしろ、高級な霊魂の場合におけるがごとく意識的であるにしろ、ともかくこの罨に捕えられて以後はその霊魂は地上生活に属するものとなるのである。受胎後二、三カ月間は比較的自由であつて、その霊魂が母の胎内につくられつつある自己の「肉の宮」を訪れて来ることはホンの時々すぎない、しかし時がたち、「肉の宮」の建設が進捗するにつれて、その霊魂はいっそう頻繁にやってくる。彼はつくられつつある自己の肉体に自分自身の特徴を与え、自分の希望をそれとなく鑄い込むために——すなわち自己の人格の烙印やまげんを押すために来るのである。妊娠七カ月のころになつて彼はその小さ

い肉体に宿ってそこに定住し、その肉体を自己のものとするのである。それから後は靈魂が脱出することはきわめて稀となる。そして出産の刹那にその靈魂は完全に肉体内に幽閉される。彼が完全に肉体に幽閉されるのは、ただにその肉体なる器官との結合が親密になったからのみではなく、靈魂自身の意識、記憶……等が自分のはいってきた心靈化学的^{サイコケミカル}条件によって全く忘失されるによるのである。

これは一般的法則である。しかしこの法則には種々の適用の相異と、様式の変化とがあるのである。その原因をわれらは研究しなければならぬ。

低級な靈魂——それはその靈魂自身にとっては偶然に捕えられ、(換言すればむしろその靈魂自身には不明なより高き力に支配されて宿りきたる)——は、なまくらに胎内の幽閉状態に満足している場合もあれば、その反対に罌の中の革紐にしばられた獣のようにもがきながら、できるだけしばしば、またできるだけはるかにその肉体の外へ逃れ出ていようとして、ただ、出産前二、三カ月間だけその肉体に帰って来るのもある。こうした相異が起こるのはその靈魂独特の反動作用——個性すなわち性格によるのである。しかしもし彼が自己の「肉の宮」を整え準備するために適當の時期にやって来ないならば、自己の要求に不適當な「肉の宮」を見いだす危険がある——すなわちその構造にととのわぬ点がある、換言すれば「肉の宮」とその居住者との間に調和の欠乏が生ずるのである。(靈魂とその「肉の宮」との間にピッタリしないところが生ずるのは、低級靈の懶惰^{らんた}状態やその反抗状態に起因するのであるが、これは贖罪のため、または精神生活を洗練し発達させるために、ことさら不完全な親の胎に宿った場合と混淆^{こんごう}しては

ならないのである。)

高級の発達をとげた靈魂は、時として意識的に自己の祖先とすべきものを選んで受胎し来るのである。彼は宇宙に「生まれ更り」の法則のあることを知り、その法則が摂理の慈手^{じしゅ}より出ずることを知り、我意を放棄して甘んじてそれに従うのである。なぜ甘んじてであるかといえ、スピリットが物質に同化せられ、意識が無意識の中に徐々に吸収せられてゆくのは苦痛であるからである。

靈魂が物質の中に同化されるのは、ただそれだけでも試練の火であり、ただそれだけでも時としてはある靈魂は一段高き進化に値するのである。

すでに述べたことがあるように、死産せる小児の靈魂は、半産して死せる胎児の靈魂と同様に高き進化をとげたスピリットなのである。(レイ又はいう——「懐妊七カ月以後の胎児には個性ができあがっている。そんな胎児を殺すことは非悪です。これを殺したものは報いを受けます。」)

幼くして死する児童の靈魂もまた高級なスピリットである。かかる場合にはその靈魂は全然その肉体の器官に宿りきらないことがしばしばある。彼らは自己の運命をあらかじめ知っているので、自己の「肉の宮」を造るのにみずから骨を折ろうとしないで、その肉体をしてただ動物的営みをなすままに放置する。(かかる場合、その生涯がきわめて短すぎて進化の試練とならないこともある。)

しかしながら、ここにきわめて稀な場合がある——生まれてもその肉体が少しも発達しないで、痴呆の状態で老齢に入るのである。これなどは前世における非常な過失の贖^{あがな}い——恐ろしい罪障消滅法——と解すべきであろうか? レイ又は答える。「多分それは罪障消滅法中でも最も辛いものなのです——なぜならこれらの

靈魂はスピリットとしての意識が残っているからです。これらの靈魂は完全に肉体中に這入りきっていないで、靈界にいながらその肉体につながっているがために、スピリットそれ自身としての意識の一部が存している、そのために鋭い苦痛を感ずるのです。わたしたちはこれらの人たちに愛を感じ、これらの人たちのためになることをしてあげなければなりません。しかしこれらの人たちを憫れんではなりません。——それはその靈魂の苦痛を増すばかりですから。』

自分は尋ねた——自分がレイヌの靈魂に命じて行かしたような産院、多数の婦人が相前後して出産するような産院において、出産の途上にあるような靈魂は互いに出会って話を交えるものだろうか。

レイヌは答える——
「いいえ、肉体に宿ったという事実が彼らを相隔あひへだてています。幽界に属する感覚が麻痺まひされてしまっています。それで彼らは互いを認めることはできませんに（一九一三年二月二十一日の実験会）

自分はヴェツテリニの同意を得たので出生の神秘についての要点を繰り返したずねることにした。自分は秩序整然と問いを発して、精密な答えを得たのである。その要点は次のとおりである。

最初に注意すべき点は、最初の生命の萌芽めばえにおいて、生殖細胞の分裂をひきおこすのは、自分がこれまで想像していたように「生命の原理」——すなわち靈魂がそれに宿ることによって起こるのではなかったということである。細胞の分裂を起こす原因は、

細胞それ自身の化学的構成によるのである。細胞の形状に変化がおこってくるのは、物質の化学的反應によるのであって、この点においてはなお受胎せんとする靈魂の干渉はないのである。

性的結合は、靈魂が地上の世界へ招かれるための信号旗である——その最も明瞭にして緊要な条件は、精子が卵子を貫穿かんせんすることである。この精子の貫穿が起こるのは交合の刹那せつなに子宮の内においてするのを正常とするのであるが、各人の体温、健康状態その他に起因して、この現象には非常の差異があるのである。

△「氏注1」ある下等生物においては、自然的受精作用に代うるに化学的薬品を人工的に導入してこれを行なうことができるが、高級なる動物においてはこの方法はなんの価値もない。これら微生物の卵は単性生殖的に發育しうるものであって、導入された化学薬品は發育するための方法をたんに左右するのみである。それは卵の進化力を決定しない。それはたんに卵に内蔵されている發育の開展に機会を与えるにすぎない。
△「氏注2」ある専門家の説に従えば、受精作用は常には交合の刹那に起こるものではない。精子の貫穿作用は性交後数時間、時としては数日後にさえ起こるものであるという。この駁論はくろんに対する回答は備考として後に掲げる。

肉体なき靈魂が、生まれ更ってこの世に来ようとするには、それが意識的であるにせよ、無意識的であるにせよ、精子と卵子との結合によって引き起こされた振バイブレーション動ジョンによって誘引され来って、これに捕えられるのである。靈魂が卵子と接触した後には、ひとたび宿つた靈魂は再び自由に卵子から離れて靈界で活動する。しかしこの刹那以後その靈魂は靈的流動体でできた条線によって

卵に繋がれているのである。

自分は二人ないしそれ以上の靈魂が同時に懐妊し来りうるものであると考えていたが、それは自分の想像に反していた。一回の交接はただ一児をもうけうるのみである。この法則は絶対的のものである。受精期間は数日間にもたがるものであって、第二目の靈魂が捕えられるのはただ交合の反復によってのみである。すなわち再びその卵に次回の交接によって他の一つの精虫が貫きいる。この際の卵子は前回と同一の卵子である——なぜなら一度に受精卵はただ一個しか存在しえないからである。数個の精虫が同時に一個の卵子に入ることがあるけれども受精作用を決定するのはただ一個のみである。他の精虫は自然的に卵子の外へ出て消滅してしまうのである。したがって受精作用を起こした精虫のみがそこに存在する。そして男女いずれかの性別の決定は、懐妊の際のこの精虫のバイブレイションの性質——振動のインテンシティの強弱——によるのであるが、この振動の性質は親たるもの特殊の状態に起因するのである。

高き進化をとげた靈魂は、みずから意識してこの世に生まれかわって出るのであるが、ちょうど好都合と認むべき親たるもの生理状態を利用して、もしくはあらかじめ親たるものの状態を都合のよいように修正しておいて、自己の希望する性別を選択して生まれ出ることができるのである……

△コ氏注▽ ドクトル氏は自分のこの記録を読んで、この靈示こそその現象を説明すべきものだというような場合に近ごろ出くわしたといわれた——一人、それは労働者の細君であったが、以前に梅毒にかかって氏の治療を受けたことがあった。彼女は最近懐妊して双生児を産んだのである。その中の一児は

出産後二、三日にして全身梅毒性の腫物に蔽われてしまった。G氏はこれに随分烈しい治療を施したが、出産後七日目に死んでしまった。双生児中の他の一児は梅毒の徴候を全然あらわさずに健かな幼児に成長したのである。ドクトルG氏の想像によれば、この健かな子供は、その細君が梅毒の良人と交合したほかに、その前か後かいずれかに交合した健康な情夫の子であろうというのである。

受精後、八日ないし十日までは卵の懐妊状態を変化することが可能である。ヴェッテリニの確言するところによれば、卵はさらに行なわれた性交または何か他のショックによって（後の場合は稀である。）収縮し、しかるのち開口してすでに受精せる精虫を放出することもあれば、それとは反対に一個ないし数個の精虫の侵入を受くることもあるのである。しかしながら更に他の精虫が卵に受精し来るまでに、一定の胎児形成の基礎——卵中に独立せる細胞の区画ができ上がっていることが絶対に必要である。同一卵に第二の受精が起こるまでに卵中に独立せる胎児となるべき細胞の区画ができ上がるだけの時間の余裕がない時には畸形児——例えば頭が二つある子供——が生まれるのである。

△コ氏注▽ 専門家の説くところに従えば、受精後ただちに卵の表面には凝結物ができて、精虫を放出することも多数受精を起すことも不可能となるのであるが、この説はそれと全然反対である。

受精に適する生殖細胞の最大活力を有する時期はいつであるかと自分は尋ねた。ヴェッテリニは月経期ののち一、二日がある時

であると答える——この時期には卵子は子宮内の十分下部まで下って来ていて、精虫はすぐそこへ到達することができるのである。精虫はラツパ管中へ進入し、例外的には卵巢内へさえも進み行くこともできるが、その進行する距離に比例してそれはしだいにその活力を失う、したがってそれだけ妊娠の効果に影響するのである。

胎児が形成せられながら、靈魂がそれに入り来らないこともありうるのである。かかる状態においては、その胎児は半産する。(レイヌのいうところによれば、かかる場合は、進化を早めるために運命が母に課したる一種の負荷であり、苦役である。)ふつう、卵子は月経期の後のみ子宮へおりて来るのであるが、月経中に受精することもありうるのである。しかしこの場合には、性交そのものが強烈なバイブレイションを惹起して、卵子が突如として子宮内に降り来り、妊娠を可能とするのである。ただし、この瞬間における受精は、月経中の生理状態に固有な不純物を卵中に導き入れる恐れがある。

ヴェッテリニはこの問題についての自身の教示が、多くの点においてなお現代の科学上の学説と一致していないことは承知の上であるといっている。自分が反対論を提起すると、ヴェッテリニは「科学上の学説は常に改変をこととしていて、この問題についての学説もしだいにみずからを修正してわが説に追隨して来るだろう。それについてなんら心配する必要はない」と、簡単に答えるのである。ここに掲げた彼の説明はある一部の専門家には、この問題の解決にかえってその緒いとぐちを与えるであらう。(一九一三年五月二十三日の実験会)

△コ氏の備考▽ ドクトルN氏(この人はみずから靈魂の生まれ

更り説の信者であることを認めていられる)は自分の手記しゅきを通読して、その読過中とくかちゅうに起こった氏の反対意見を深切にも書いてくださった。

すべて自分の手記にあらわれたる報告または教えは、スピリット自身の意見もしくはレイヌという靈媒に起こった心靈現象の忠実な筆記であつて、自分自身に責任はない。それでN氏の批評に対して自身は少しも論争する意志は起こらなかった。それで自分はただ交霊状態にある靈媒にN氏の反対論を読んで聞かせて、彼女の答つるところを筆記したのである。それを自分は次にかかげる。なぜなら彼女の答えはヴェッテリニの教えのある点を完成することになり、またそれを釈明することになるからである。自分がN氏の反対意見を催眠中のレイヌに読んで聞かせると、レイヌは一瞬間それを傾聴しているような様子をして、そしてただちに明瞭にくわしく答えるのである。

△駁論▽ 受精の瞬間について——ある実験の結果、受精は性交

のとき常にはすぐ行なわれるときまつていないようである。精虫は数日間生存することができ、性交後若干時間後に卵と結合することもできるのである。(N氏)

レイヌはすぐさま答える——「もつとも、それは精虫は数日間生きていて、ずいぶん後に卵と結合することもございますわ。しかしそんな場合にはスピリットが来ていませんから、靈魂が宿るといふことはないのです。性交は受精作用の原因ではありません。しかしそれはスピリットを招よび、靈魂を捕捉して宿らせる誘引となるのです。スピリットが来ていなくとも、精虫は卵と結

合することができません。しかしそれでは靈魂が宿って来ることはできないのです。ある場合には胎児まで形づくられます——しかしこんな胎児は生活不能です——そして半産または死産してしまふのです。」

今度は自分（コ氏）が異論をとなえた——それでも人工受精が成功した例があるではないかと。レイ又は答える——「ええそんな場合は、意識してこの世に生まれ出て来ようとわざわざやって来た靈魂が宿ってくれるのです。それは熟慮して画策かくさくされた行爲です。靈魂みずからの選択です——偉大なスピリットにありがちな意識的受胎です。しかしそれはきわめて稀です。もし人工受精を一般に盛んにやるようになれば、生きた子供の生まれる割合がきわめて少ないでしょう。」

自分は今ちようど、「出生」問題に関するノートを写し直している時なので、人間の「靈魂の受胎」の法則は動物にも当てはまるか——すなわち動物の場合にも一度の交合に受胎し来る靈魂はただ一つだけであるかときいた。

答✓動物については法則は別である。唯一回の交合にもそのクラスの数個の靈魂が宿って来るのである。（一九一三年十二月十日の実験会）

十七 スピリット自身はいかに「死の神秘」について語るか

ヴェテリニは語る——死期はあらかじめ定められている。

病気および災厄は、あらかじめ定められたる運命を成就せんがために、靈界の不可視の使（スピリット）がその人を導くところの手段である。「生」は、時として臨んで来る「死」に対して極力

争おうとする。このことは死の神秘を恐怖する未発達靈魂の人々において特にそうである。しかしながら靈界メッセンジャーの使者が靈魂の脱出するのを待っている。そしてこの世の終焉が来たときには、そのメッセンジャーが助けてくれる。もし必要な場合には、彼は強いて靈魂を脱出せしむることもあるのである。

肉体をはなれたる靈魂は、高級なスピリット——白色のスピリットである——の集会の前につれて行かれる。高級なスピリットはこの新参の靈魂の進化の程度を鑑別みわける。もし進化の程度が低ければ、その靈魂はある長期間、あるいは短期間、地上の雰囲気内を彷徨ほろころしまわり、自己が肉体的生活を営んでいた頃の生活を回顧し、他界より人生の争闘を観察して自己の責任を自覚せしめられ、自己の意識を發達せしむることを学ぶのである。これらのことは、まず新参の靈魂が高級のスピリットに引き廻されてするのであるが、や

がてただひとり、あるいは同じ程度の進化にいる靈魂たちと一緒に、あるいは無関心な気持で、あるいは悲嘆にくれながら、あるいは愉快な心持で（これらの気持の相異は靈魂そのものの進化の高さで決まる）空間をうろつきまわる。そしてやがて時が来る——それは多少とも長き期間の後である。靈界の支配役のスピリットが、彼を再び地上に送る——それは新しく生まれかわって、なおいっそうその靈魂を向上せしむるための経験を受けしめんがためである。

もし、肉体をはなれた靈魂がすでに秀れた進化をとげた靈魂である場合には、みずから進んで、ある一定の目的のためにさらにもう一度地上の世界に生まれかわって出ることもあるのである。その一定の目的とは、自己犠牲の行為によって、自己をいっそう

高き進化の圏内に運ばんがためである。

ヴェッテリニのごときスピリットは、ただかくのごとき目的のために、この地上に降り来るのである。しかし、標準としては、ここまで高き階級に達したる靈魂がさらにいっそう高き進化をとげるのはその靈界における活動によってである。彼らは白色のスピリットとなる——地上の世界に関するあらゆる事件の比較的至上権を有する審判き役となるのである。白色のスピリットは更に進化をつづけて他の「靈圈」に入るのであるが、この「靈圈」のことは人間にとっては知り難く了解し難きものである。ヴェッテリニはそれについて（少なくともその瞬間）は語ることを拒んだのである。しかしながら、自分はこの一段進んだ「靈圈」いなむしろ一段進んだ状態においては——自分がここに状態というのは、彼らがより高き地圏に生まれかわって来るのではないように思われるからである——かかる高級なるスピリットは、あらゆる地上的な興味を全然超越してしまっている。かかる興味は彼らにとっては全然無意義である。彼らは地上的なるものより一段高く生長してしまっているということ言葉を端より総合しえた。（一九一三年二月十九日）

（著者注） 靈界はどこにあるかの問題は今なお論議のつきない問題である。しかし地上に浮浪する階級の靈魂の住む世界が、われわれの住んでいるこの地上と同じ圏ちゆうけんにあるということとはたしかである。空気とエーテルとは同じ場所に共存しているであろう。それと同じようにスピリットとわれら生者とも同じ場所に共存しうるのである。われらは死せば「空気の世界」から出て「スピリット質の世界」に移行する。「スピリ

ット質の世界」は科学者のいわゆるエーテルとは別ものようである。が、「空気の世界」と共存しうることエーテルと同様である。この地上に浮浪する階級の靈魂の世界はいわゆる「浮浪靈の世界」であって、靈魂の落ち着くべき純粹の「靈圈」ではないようである。靈圈の最下層は、地獄ないし煉獄れんごくの状態であって、すでに「浮浪靈の世界」ではない。最下層の上層すなわち第二層靈圈には常人じょうじんすなわちきわめてふつうの靈魂が住み、地上に指導のために神懸りして来るスピリットの世界は、この第二「靈圈」の上層に住むものが多いとのことである。元英ブリテイニッシュ国心ユニカレッジ靈科学サイキックサイエンス大学の学長マッケンジー氏が、みずから靈魂出遊の方法を用いて探検したと称するところによれば、靈界は七圏にわかれて地上の靈魂を教育するために降くだってくるのは、おおむね第二靈圈の上層にいるスピリットであって（これが青色のスピリットである。このスピリットが一段の進化を遂げれば、その青色がいよいよ冴えて白色のスピリットになるといふ）それ以上の階級の靈界人はめったに地上の世界のことには関係しないといっている。靈媒かかに憑りて人間を惑わせるのは「浮浪の靈」が最も多く、人間界指導のために神懸りする第二層の靈界人はこれにつき、白色スピリットにいたってはきわめて稀である。マッケンジー氏は靈界の各圏と各圏との距離までも計ったと称してその数字を発表しているが、距離は相対的認識の尺度の一種であって、境を異にするとき、（すなわち靈界においては）その数字が地上のわれわれにとって何を意味するかすこぶる不明瞭である。しかし靈能力者が靈魂を出遊さすとき、上昇または下降の感覚を味わうのは事実である。「浮浪靈の世界」

は現世的地上雰囲気内に共存しうるが、靈圈の第一層はある靈魂の通信によれば、地表よりも低しといい、ある靈魂の通信によれば地表よりも高しというが、位置の高下や、距離の感覚が、「思念とほとんど同時に、その念ずる場所に到達しうるような靈魂」にとつて何を意味するかは、われらの地上的感覚をもつて類推することはできない。またある靈魂は肉体死後、無意識状態のまま、自己に割り当てられた靈魂につれ行かれてそこで目覚めるから、その靈魂が地表よりも上層であるか下層であるかを知らないことは、われらが睡眠中にビルディングの幾階目かに運ばれて目覚めた時に自分が何階にいるかがわからないのと同様であろう。

自分は、歸幽せる靈魂が白色のスピリットの審判廷に連れ行かれて審判きを受けるといふ問題に復かえつていった——それはわれらの地上の社会的秩序の觀念にあまり似ているのでおもしろくない気がすることを自分は告白したのである。なぜ、靈魂の階級別けが自動的に行なわれないのであろうか。一つの靈魂はその前ぜん生しょうにおいて、他の人間の批判には関係なしに一定の進化を遂げる。いわゆる審判廷しんぱんていなるものがある時は、必然に人間の要素が入り込むのである。では、この靈界の審判廷——スピリットの設立した法院——スピリットたち自身の考案で設けられた裁判廷——はしたがって弁論に付せられるものであろうか？ それとも、それはいつそう高い法則の機能であらうか？

ヴェツテリニの答えるところによれば——何よりもまずわれわれは、地上の世界の關係を言い表わす言葉で靈界の生活状態を説明しなければならぬのだということ念頭に置いてもらわなくてはならないのである。現世の人間の言葉で靈界の生活を言いあらわそうとするとき、混雑やまちがいの起こるのはやむをえない。さて靈界の審判は、われわれの言葉の意味するような意味では、白色のスピリットの宣告する判決でも、有罪無罪の宣告でもないのである——それはまったくちがう。死後肉体をはなれて歸幽せる靈魂は、これら高級なるスピリットの前に、生前いかなる生活をなせしかについての責任を自覚せしめられるために連れて行かれる。歸幽の靈魂の階級別けを生ずるのは、その時生ずる靈魂自身の良心の審判によるのである。換言すれば、新参の靈魂が白色のスピリットの前を通過することは、ちょうどわれらが鏡の前を通過するに等しいのである。彼はその時、自己自身の本当の相すがたを自覚するのである。

地上の生活とは全然異なる状態をわれわれは理解することは不可能であるがために、靈界の生活の秘密を闡明せんめいすることは困難なる問題である。しかしヴェツテリニはなおいつそう十分なる説明を後の機会に与えることを約束した。われらは待たねばならない。
(一九一三年二月二十一日)

○ ……「死」の一般的問題について自分はまたたずねた。ヴェツテリニは説明を単純化するために進化の程度を四段階に分けて、これらの各段階の靈魂が地上の生活から靈界へうつり行く状態を説明してくれた。

第一階級——最低級——この階級の靈魂は自己の宿っている肉体を最後の極度まで使うのである。その靈魂は自己の機関とする肉体に言葉どおりしがみついているのであって、この階級の靈魂

を肉体から引き離すためには、時として霊界のスピリットの干渉が必要であるのである。この階級においては、死後少しも意識をもっていない。かかる霊魂は地球の低い雰囲気内をいわば「昏睡」の状態でなまくらに彷徨ほうこうしながら、次なる生まれかわりの時期を待つのである。

第二階級——においては、肉体を去って帰幽せる霊魂は霊界のスピリットの群によって迎えられる。これらのスピリットたちは帰幽の霊魂の意識を目覚めしめ、その責任の観念を喚よび起こそうとするのである。彼らは帰幽の霊魂の能力に応じて死の現象のなるとるかを理會せしめようとするのである。かかる帰幽の霊魂が今度生まれかわってこの世に出る場合には、前なる生涯においてしたところの生活——それが善であろうと悪であろうと——の反動的生活を営もうとするのである。そしてこの反動的生活を通じて彼は自己の責任感の幾分をあらわにするであろう。

第三階級——の帰幽の霊魂においては、すでにある程度の意識を發達させている。彼は責任を知っている。それは帰幽の前においてさえも、睡眠または昏睡状態中すでに、自己を待っているところの霊界の状態を予見することができるのである。死に面してその人が一定の態度——恐怖ないし平安——を示すのはこの予見によるのである。すなわち睡眠または昏睡中の予見にもとづいて、意識が昏睡から覚めたときに漠然たるそれとなき予感におそわれるのである。かかる霊魂がいよいよ肉体をはなれて、霊界の案内者に導かれて白色のスピリットの居列いならぶ前につれ行かれれば、彼は自己の過去の生活をスツカリまざまざと意識せしめられ、その責任を感じるのである。この程度の進化状態においては、帰幽の霊魂は自己の未来の生活に横たわっている試練の火を理會と諦念あきらめ

とをもって受けることができる——なぜなら彼みずから試練の火の必要をさとっているからである。

第四階級——最後にこの階級の進化を遂げた霊魂においては、臨終にのぞんで運命の修正を申し出ることのできるのである——これは今日、青色スピリットがレイヌに説いたところであるが、ヴェツテリニはそれを次のごとく説明した——運命によって定められた死期が近づいて来たときに、ある程度まで發達した霊魂は、肉体の睡眠中または無意識状態中に肉体を脱出して、司配級のスピリットの所へ相談に行くことができる。これらの司配級のスピリットに助けられて彼は自己の生活について負うべき責任とその結果とを完全に意識する。このとき、もしその霊魂が——すでに高き進化をとげているのではあるが、——なおしばらくの間この世に生まれ代わって来る必要がある場合には、彼はあらかじめ定まつた時刻に死なないで、その瞬間まで耐えしのんできたところの同じ苦痛の状態を、数年間ないし数カ月間継続して、ふつうならば受けるべきはずの、もう一度この世への「生まれかわりの」緩徐かんじょな過程を踏まないで、地上における最後の進化を、生まれかわりを省略して、高速度に完了するのである。

これは白色のスピリットの非常な恩恵的取り計らいのようと思われるのである。(一九一三年四月十四日)

○

(この日G氏夫人も実験会に立ち会ってくださった。)

霊媒レイヌの不健康にもかかわらず実験会はうまくいった、霊媒の霊魂の出遊を試みたがあざやかにゆかなかった。彼女の霊視は緩慢で混雑しており——彼女の霊魂はただその肉体に帰りたい

の一念をもっていた。これに反してスピリットの言葉を取りつぐのはハッキリしていた。

彼女は発熱していたのかかわらずすみやかに統一状態にはいった。が彼女は冷たくはならなかった。自分が問いかけたとき、彼女はいう——わたしは何も見えていません。わたしはここにいるのです。肉体を離れてはいないのです。何かわたしにさせてくださるだろうと待っているのです……

自分は自分の亡父の所持品を彼女に渡して、この品物の持ち主をさがしてここへつれて来るように求めた。(自分は自分の父自身から死んで幽界へいったときの話を聞きたかった。父から詳細の研究的な話ができるかどうかは疑問であった。しかし自分は実験してみたかったのである。)

数瞬間ののち、レイ又は自分の父はここに来ているといつて知らせた。自分は自分の希望をレイ又は説明して、父の死の経験をくわしく話してくれることが自分にとって、また自分の従事している仕事についてどんなに興味深いことであるかを亡父にとりついでくれるようにもとめた。

レイ又は取りつごうとする話を長い間傾聴していた。自分は待ち遠しくなって、早く話してくれと促す。今あの人が憶えていられるだけを話している最中です、黙っていてくださいとレイ又はいう。最後に自分は、彼女が取り継いだ言葉の端々から、父が「死の自覚」なしに霊界へいったものであることを察した。父は何も意識しなかった。なんらのショックも受けなかったのである。父は突然、それはちょうど夢でも見るように、自身を案内してくれつつあるスピリットの群にとりまかれて、はるかに高く、きわめて高く、またほかのスピリット(これが司配級の霊であることが

後でわかった)たちが集まっているところへつれて行かれる自身に気がついた。司配級のスピリットは父に対してその過去の生活を語らしめ、過去生活のうちにある善悪をさとしめようとしたけれども、それはむだであった。父はなんにも理會しなかった。すべてが父にとっては困惑の種子であり、非現実的なものと思われた。こうして父が過去の生涯の責任を理會しないので、案内者たるスピリットは、彼をもといた下層の地球の雰囲気へ送りかえしてぜんぜん無意識の状態で放置したのである。父にとって自身の境涯がはつきりわかってきたのはそれからズツと後のことであった。彼が現世と幽界との差別や意識をつかむことができたのは、実に近ごろ——われわれの交霊会に出て来るようになってからである。今や光が彼の意識をつらぬきつつある。彼の記憶はいつそうハッキリとなり、彼は真に理解しつつあるのである。(父が自身の状態についていえるところはヴェツテリニが第二層に属するといったところに符合するのである。)なおいろいろ話したのちに自分は父にその労を感謝し……それからレイ又はに靈魂遊離の実験をするようにもとめた。(一九一三年四月十六日)

○

自分はヴェツテリニに話したいと申し出た。彼はそこにいなかった。来るのに長くかかった。レイ又ははその理由を知っている——今までわれらと一緒にいたスピリットがこのあたりの雰囲気を汚してしまつたのである。彼がここへ来るまでに前のスピリットたちから放射したバイブレイションが発散してしまわねばならないのである、いわば屍臭を脱しないスピリットの雰囲気は彼にとって毒素のようなものであると。

とうとうヴェッテリニはやって来て自分の問いに答えようと言う。

自分はまず尋ねる——突如と見舞う急激の死は靈魂の進化にどんな意義があるか。

答——急激の死といえども予定されたるものである。それは決して偶然^{チャンス}ではない。それは正常の進化の道程を進んでいないで、永久にこの世への輪廻を繰り返さねばならないようなある人々の靈魂の進化を早めるために「摂理」によって決定されたものである。急激の死によって起こされたるショックはその人の靈魂に強き反動を惹き起こしてすぐに進化の正道を進ませはじめる。その人の靈魂は反逆せんとし、理解せんと試みる。「理解せんと試みることは進化することである。」この急激の死が自己犠牲の行為（たとえば他を救助せんがための死）に原因するというごとき場合には、彼のヒロイズムまたは自己犠牲の功德は、機械的なショックの上に追加され、その靈魂は進化の階梯^{かいてい}をたしかに大踏歩^{だいとうほ}でのぼるのである。

これまでの交霊会において、レイヌがいったところによれば、同一家族の人員はその靈的流動体^{フルリイド}が同一であるべきはずなのは明瞭である。で自分はこの第二の疑問を発する——靈魂はすべて自分自身の靈的流動体^{フルリイド}を創造するのではないか？ それではどの部分が世襲的であるのか。

簡単にするために長い答えの要点のみを摘記して置く。——
学理的にいえば、ここに、今まで一度も肉体に宿っては世に出たことのない靈魂があるとす。この靈魂の靈的流動体^{フルリイド}（幽体）は特殊の振^{バイブレインション}動をもっていない、いわば白紙的または非晶的実質のものである。ところがこの靈的流動体^{フルリイド}が受胎作用の渦巻

のなかにとらえられ、胎児形成中母胎のなかに養われ、父母の有するバイブレインションの印象を強くうける。父母は自己自身より抽出した実質で器官をつくって子に与えるので、子の靈的流動体^{フルリイド}は消し拭^{ぬぐ}うことのできない印象を与えられてそれを永遠に担うのである。生後になって本當に個性的な生活がはじまるとき、その靈魂が自己の靈的流動体^{フルリイド}のバイブレインションに更に他のバイブレインションを加えようとするのはその反動である。しかし父母より承^つけついでバイブレインションを破壊するのではないのである。

肉体が死するとき、この靈魂は再び靈界に入るのではあるが、そのとき彼は最初父母のバイブレインションに影響され、次いで現世の生活中、自己靈魂の反動的改造によって影響された靈的流動体^{フルリイド}を有するのである。

この靈魂が、再び現世に生まれかわって出る場合には、前にまったく同じ過程を繰り返すのである——第一、父母より受くる拭^{ぬぐ}い難き印象、第二、靈的流動体^{フルリイド}に加うる自己自身の反動的改造、これらの二つの影響が、以前に存するバイブレインションの上に接ぎ木せられる。しかしながら先在するバイブレインションは決して破壊されてしまはしないで、この靈魂が幾度生まれ代わろうともつづくのである。これらの相影響するバイブレインションは相合^{あいがつ}して、その靈魂にのみ独特な配合の靈的流動体^{フルリイド}を形づくる。しかしその配合状態は独特であるとはいえず、彼の祖先全体の振^{バイブレインション}動的影響は依然として存続するので、これを見別けることができるのである。

上述せるところによって論理をおうて行けば、「体そのもの」の進化という問題に触れるのである。現世に生まれ出た靈魂は、その靈的流動体^{フルリイド}を仲介として肉体そのものを支配する反動力を有す

る。肉体(すなわち地上の器官)がいつそうデリケートにせられ、
精妙にせられ、約言すれば洗練(リファイン)されるのは靈魂の有するこの傾向、
すなわち向上の熱望、および意志が靈的流動(フルイド)体を介して肉体に影
響を与えるのである。そしてこの肉体の器官の進化洗練は遺伝に
よって継承せられて、しだいに子孫はいつそう進化せる器官を有
するにいたるのである。

子孫をもたない人々も、肉体器官の進化に、それでも幾分は助
けをなすのである。というのは死後彼らの肉体を構成する諸要素
は空間に放散して、それが利用されて新しき肉体の組織がつくら
れる上に、その獲(え)たる価値だけの貢献をなすのである。(一九一三
年四月二十一日)

○

われらは「死」の問題についてすでに教えられた事項につき繰
り返し質問することを許された。自分は自分のノートに書いてお
いたことを極度の注意をもって確めた。そしてついに、進化の各
段階に於いて靈界へ移行する状態を詳細に説明してもらった。す
でにこの問題について自分が記録しておいたところは正しい。こ
こにわずかばかりの補正をノートして置こう。――

人間の生涯は摂理――「不可知の手」――によって定められて
いる。恒星と遊星との運行の影響の下に一定の妊娠を遂げ、出産
し、そして一定の時日に死するということは摂理の手できめられ
ている。が、この運命は修正を受くるのである。審判階級のスピ
リットが干渉するのはここである。もし運命の修正によって個体
靈魂の進化がたすけられるならば、星の巡行によってあらかじめ
定められたる死の時期を早めたり遅らせたりするのである。

(例をいえば、レイヌの父系の祖母は最近に死んだのである。こ
れについてヴェツテリニの語るところによれば、彼女の死は星の
影響に従うならばもっと遅く来るべきだったのである。しかるに
その保護のスピリットが彼女の受苦(じゅく)をもはや十分なりとみとめて
すぐ彼女の靈魂を釈放したのである。これと反対に受苦の期間を
延ばして死期を遅らせることも起こりうるのである――彼女の母
系の祖母は本来ならこの四月に死んでいたはずであると。)[死の
使者(Messengers of Death)はこの仕事にばかり従事している
特殊階級のスピリットではないのである。彼らは新たに帰幽せる
靈魂の世話をする役目の一群のスピリットに属するものである。][死
の使者]は数人のこともあればただひとりのこともある。

自己の責任を知ることができるだけに、意識の発達した靈魂は
幽界へ移行するやいなや彼の生前のあらゆる行為をまともに見る。
そして自己の行為を精査して生じた悲嘆と悔恨の情とは、彼が次
にこの世に生を受けたとき一段高き進歩を遂げるための努力を喚
起するのである。しかしながら自責の意識の発達していない靈魂
も、時として靈界の審判廷の前に伴(つ)れて行かれるというのは、彼
はその時は何もハッキリ自覚しなくとも、漠然とある執拗な印象
を受け、やがて時が来るとこの印象が彼に反省と省察(せいさつ)との機会を
与えるからである。

十分発達せる靈魂は、自身が次の世に受(う)くべき運命を選択する
特権をもっている。彼はもはや輪廻の波動にただ受動的のみには
従わないのである。彼は自己が欲するならば、靈界にそのまま止
まってそこで自己の進化をつづけることもできる。また彼は他の
人間の進化をたすけるために、周到なる考慮の後に相当な位置に
生まれかわり出て、他を利することによって自己をいつそう利す

るのである。靈界における進化はいっそう速かなれどもいっそう困難なのである。それで多くの靈魂はおそくとも苦痛少なき現世の修行を選んでいる。地上の人間にとってはこの靈界における進化が何より成り立っているかを知ることができない。われら人間の擱むことのできるただひとつの点は、まず自己自身をあらゆる現世的な繫縛、あらゆる地的な興味から截ち切ってしまうことである。じよじよに、彼は与えられた運命を修正しうるまで進化をとげる——彼はかようにして、「運命」そのものの王座に近づく。

しかし「運命」そのものの本質は依然として不可知である……高級のスピリットは「運命の神秘」についてその真相を穿とうと一部の努力を捧げている。これらのスピリットは運命が不可抗的に各人の生活の上にそれ自身を課していることを知っている。ある事件——幸福もあれば不幸もある——は避くべからざるものである。「不可知の手」——神秘的謎の手があらかじめそれを用意しておくのである。

ヴェッテリニは説いて曰く、ある「生命」が受ける諸種の境遇のおよそ一半は業運の法則によって決定せられているのである。残余のうち半分は個体の自由になしうるとして他の半分は高級なるスピリットの修正の手にあるのである。各人の生命を支配するこれら諸種の影響要因の区分は明瞭で、規則的で、権威ある語調でレイヌの口を通じて語られた——ライフの半分は業運によって決定せられる。四分の一は各人の自由意志に属する。他の四分の一は高級靈の手に委ねられている。

スピリットの修正の手が必要なことは明らかである。しからざれば業運のみが絶対なものとなり、道徳は覆され、進化も何もあつたものではないからである。

(著者注) 「神の子」なる人間の実相を現象世界(現界、幽

界、靈界等を通じて)に実現するのが人生の目的である。そして人間の運命とは「神の子」なる人間の实相(因子)が現象界に投影する時時間的空間的に展開するのにおのずから一定の順序を追うて展開してゆくように大体定められているのをいう。それは譬えば朝顔の種子の中にはすでに「花」の因子が包蔵されているが、それが現象界に「花」となつて完成するまでには、日光に逢い、温気に遇い、芽を出し、蔓を生じ、ついに花を開くというように大体一定の順序を追つて展開するがごときである。かくのごとく、「神の子」なる実相人間もその投影の現象界に完成するのには大体一定の時間を要し、植物が日光に逢い、雨露に遇うがごとく、あるいは幸福に恵まれ、あるいは逆運と戦うことによつて、ついに実相人間の現象界への投影を完成するのである。しかし、その投影が完成するには、その投影は「念波の集積」で成り立っているし、人間は心の自由をもち、自由に実相の悟りによつて念波を浄めえもすれば、迷いによつて念波を汚すこともできるのであるから、現象世界に実相人間を顕現する過程(進化の過程)を、心しだいで縮めることも長くすることもできるのである。靈魂進化の過程を短縮するのは念の浄化による。念の浄化には実相を悟ることが第一であり、物質欲に捉われざることが第二である。物質欲に捉われざるためには「物質本来無し」の真理を悟るが第一である。「物質本来無し」の真理を悟る程度に達せざる者には、物質の快に捉われざるためにみずから進んで苦を求めて喜ぶか、物質の快を求めてかえつて苦難をうる体験を通して、ついに物質欲に捉われざるにいたるかの

二途しかない。前者はみずから進んで嘗める苦行であり、後者は他動的に業運として来る苦難である。その他に過去の宿業の自壊する過程として、靈的流動体に擾乱を起こす病苦もある。苦難がみだりに取り去られず、多くの靈魂が苦行の価値を力説しているのはこれらのいろいろの理由によってである。

自分は自殺の意義を尋ねた。

答——結果から言えば、自殺も「運命」がある人の前に置いたところの「定め」である。しかし彼は四分の一だけの自由意志をもってその運命を拒むことができる。彼は遺傳的傾向に抗うことができる。そして、場合と、彼自身との価値とによって、保護のスピリットが助けくれたり、助けてくれなかつたりするのである。

(著者注) この場合の運命とは業運すなわち「業の流転」である。悪念波の集積が自壊する必須の過程である。

他に興味ある点一つ——高級の発達をとげたるスピリットは、自己が今まで多大の努力を経てかち得たる優越な地位を、利己的に濫用して靈界に懶惰の生活を送ろうと思えば送ることもできるそうである。しかしこの僭上な行為はいつまでも続かない。ある時期がくれば強力な磁力の流れが宇宙をかすめて走る。この磁力の流れに打たれてかかるスピリットは地上に落とされる。かようにして懶け者のスピリットはその無活動の状態を嫌でも放棄せしめられるという。(一九一三年五月七日)

自分はステッド氏のことには話をもどした——彼の生活——かくのごとき寛大な生活——とその死のことを語った。ステッド氏よりの靈界通信によれば、氏は死するとすぐ完全に意識をもっていたのである。氏の悦びの深さがうかがわれる。氏はその靈界通信で言葉につくしがたき幸福……等を数々のべてやまない。ヴェツテリニはステッド氏のことについては何も知らなかった。が、「そんなにすみやかに幸福を経験することができるのは非常に高級な靈魂に相違ありません。……そのことについては、あなたのおっしゃる彼の生前の行為が、彼の靈魂の偉大な進化を証明しています」と付け加えた。

ステッド氏の靈界通信にあらわれる荒唐無稽のような奇怪な靈界の光景を、いかに解すべきであろうかと自分はたずねた。(ステッド氏は自己が前生になした善行を描いた引き幕を壁に飾った靈界の宮殿や、驚くべきその立派な自分の休息所のことなどを書いているのである。)ヴェツテリニはいう——「これらは地上の人間にとって不可解な靈界の感じや感覚を人間の知識にわかるように翻訳したものである」と。(一九一三年十一月二十八日)

△コ氏注△ 急激の死はなにゆえに、進化の本道を進まず地上の生活に執着せる靈魂に進化を強制する結果となるか。(この理由は地震、洪水、戦争等による数百数千の人間の惨死の場合にも、むろん適用せられるのである。)

ふつうの死の場合には、靈魂はじょじょに静かに肉体の全面よりたちのぼる霧のように脱出する——そして靈的流動体(複体)全体の分離が完全に行なわれる。

急激の死の場合には靈魂は突如として口より逃れ出る。あ

たかも蒸気が汽罐の破裂口より逸出することく、靈魂が急遽逸出する際、地上により多く牽引されている靈的流動体の重濁せる部分が取り残され、精妙な念波的存在なる靈的流動体のみが靈界に移るのである。この取り残された重濁せる靈的流動体こそ、彼の地的繫縛——彼の今までの悪しき傾向、趣味、習慣等——を構成している部分なので、かかる部分は通常死の場合には靈界まで持ち越され、再びこの世に生まれ代わる際にもその念波的存在が執念く付きまとい悪傾向を持続するのである。

これをたとうれば、ふつうの死は、ゆっくり構えた引越しのようなものである。彼は十分時間を費して、もとの住居の例にならつて、もとの住居を飾ったところの品物でやはり今度の住居をも飾ろうとして、家具、調度、美術品、骨董品、記念品などを念入りに運ぶのである。そして彼は再び住居はかわつても従前の習慣に従つて生活し始める。ところが急激の死は、たとえば火災の際にやむをえず立ち退かねばならないようなものである。彼は取るものも取りあえず手と身とで逃れるべく強いられる。彼は新生活を営み、新しい財宝を得るために、スツカリ新規播き直しをやらなければならないのである。

二十 スピリット自身は「靈魂の品等」についてかく語る
この世に出生した靈魂の高さを示す徴候というものはあるのであろうか——と自分はいった。

ヴェッテリニは答える——「直覚的認識——靈魂による靈魂の認識のほか、外より見える徴証もたくさんある。そのうちの二、

二をここにいつてみよう——第一、雅量である。しかしここいうところの雅量とは人間靈魂の深き認識より出発したる他に対する赦しである。それは聡明なる雅量であつて寛大との必要を知るところの雅量である。Bonte - severite (寛大なる峻厳)こそ向上せる靈魂の特徴として記憶すべき一つである。第二、卑しき者、世に出でざる者、弱きものに対する愛——社会的成功、名譽、地位等に対する無関心によつてもなわゆる愛である。第三、哲學的思索の傾向、靈界の神秘を知らんとする熱望、その神秘に貫き入ろうとする努力——これらは靈魂の進化そのものである。」(同年十二月二十九日)

二十二 スピリット自身は「小兒の靈」および壽命について語る

ヴェッテリニの答——「幼くして死すべく定められている小兒の場合のほかは、各人の壽命はまだその出産の時には定まつていない。ふつうの生活を送る人々にとっては、死の日付けは、その生活中に決定せられる——その生活のやり方、各自の業の加算によつて決定せられるといつてもよい。彼らの意識の發達は運命を早めたり遅らしたりするのであるが、いずれの場合にも死の日がやつて来るズツと以前に、自然にほとんできまつてしまうから予知することができる。」

次に自分は、レイヌの話によれば幼兒のうちに死ぬのは、非常に高い進化をとげた靈魂の徴候であるといふのであるが、これは正しいかどうかとヴェッテリニに尋ねた。「確かにそうだ」とヴェッテリニは答える。で自分はいった、五歳から十歳までの間に死ぬ子供のうちには精神的に劣等な、否、時としては白痴のように

さえ思われるのがあると。

「それも本当である」とヴェッテリニは答える。「しかし、それは単に肉体器官が低級なのであって、靈魂自身の進化の程度にはなんの関係もないのである。むしろ多くの場合において、間近に迫った自己の肉体の死をそれとなく予知しているのです、彼らは器官を改善しようという努力をとらないのである。」

で自分はたずねた——幼児期のうちに死ぬのが、その靈魂の高級な徴候であるならば、年老いて死ぬのは、その靈魂の低級なことを示しているのでしょうか？

「必ずしもそんなことはない。概括していうならば、低級なる靈魂は、できるだけいろいろな経験を積んで進化の機会を得るために長生きしなければならない。しかし、高級な靈魂といえども長生きすることもある。——それには種々の理由がある——たとえばその人がまだ地上において果たすべき役割のあるとき、その人の存在が周囲の人々の進化に役立つとき、それからまた、単にその人が地上の生存をなお享受したいと希こいねがっているがごときこれである。」(一九二三年十二月二十四日)

○

自分は再び幼くしてこの世を去るべく定められた小児の問題に帰った。たとえばピセートロのような慈恵院には四、五百人もの幼児がそこに収容されているのであるが、皆白痴か、片輪者か、三歳ないし十二歳までで死ぬような運命をもっているのである。では、われらはこれらの憫あはれな幼児を高き進化を遂げた靈魂であると信ずべきであろうか？ 答えは正にしっかりと——「彼らはずべてほぼ同じ階級の——かなり高き階級の靈魂であるのだ。」

この世に出生せんとする瞬間、彼らは自分の前途にいかなる運命が横たわっているかを察知する。が、彼らはこの苦痛多き運命を甘受する。時としてはみずから進んでこの苦痛な運命を選んで受ける——それはいつそう高き進化になおいつそうすみやかに到達せんと欲するからなのだ。」

二十三 スピリット自身は「個性の存続と価値」についてかく語る

個性的意識は、進化の過程を通じて層一層個性的となるものであるか？ またスピリットは常に自己自身の存在と継続と同一自己を意識しているか？ それともある教義でとなうごとく、進化するということそのことのために、個性的意識が普遍的意識に吸収されてしまうものであるか——すなわち靈魂の進化とは緩徐なる個性の破壊的過程であるのか？

自分のこの問いに対してレイ又は鋭い注意をあつめて聴いていたが、自分の方へ振り返った——「コルニリエさん。ヴェッテリニのおっしゃるところによりますと、個性的意識は進化の度が進むに従っていよいよますます大となるのです。靈魂が一生涯によって獲得し征服したすべては、その靈魂の個性をそれだけ明瞭にそれだけ強大にするのです。個性は彼のものです。彼のみのものです。蒼色のスピリットは灰色のスピリットよりも個性が明瞭です。白色のスピリットは蒼色のスピリットよりもなおいつそう個性的です。なおいつそう高級なスピリットは、なおいつそう自己自身であるのです。The Still higher Spirits are Still more them selves。」

上記の意味の厳げん粛しゆくな回答をヴェッテリニはしたほかに、彼は個

性を滅することを高き進化とみとめる一派の思想家に対して、鋭い批評をあげせかけたものらしい。自分はレイヌがヴェツテリニに対して「それはあまり苛酷な批評ですわよ。……なぜあなたはこの一派の思想家にそんな憤慨ふんがいなさるんです？……これらの人たちもまた真理を発見しようとしてるんじゃないやありませんか」といっているのを傍かたわらから聞いたからである。（一九一三年四月二日）

生命の實相 谷口雅春 日本教分社